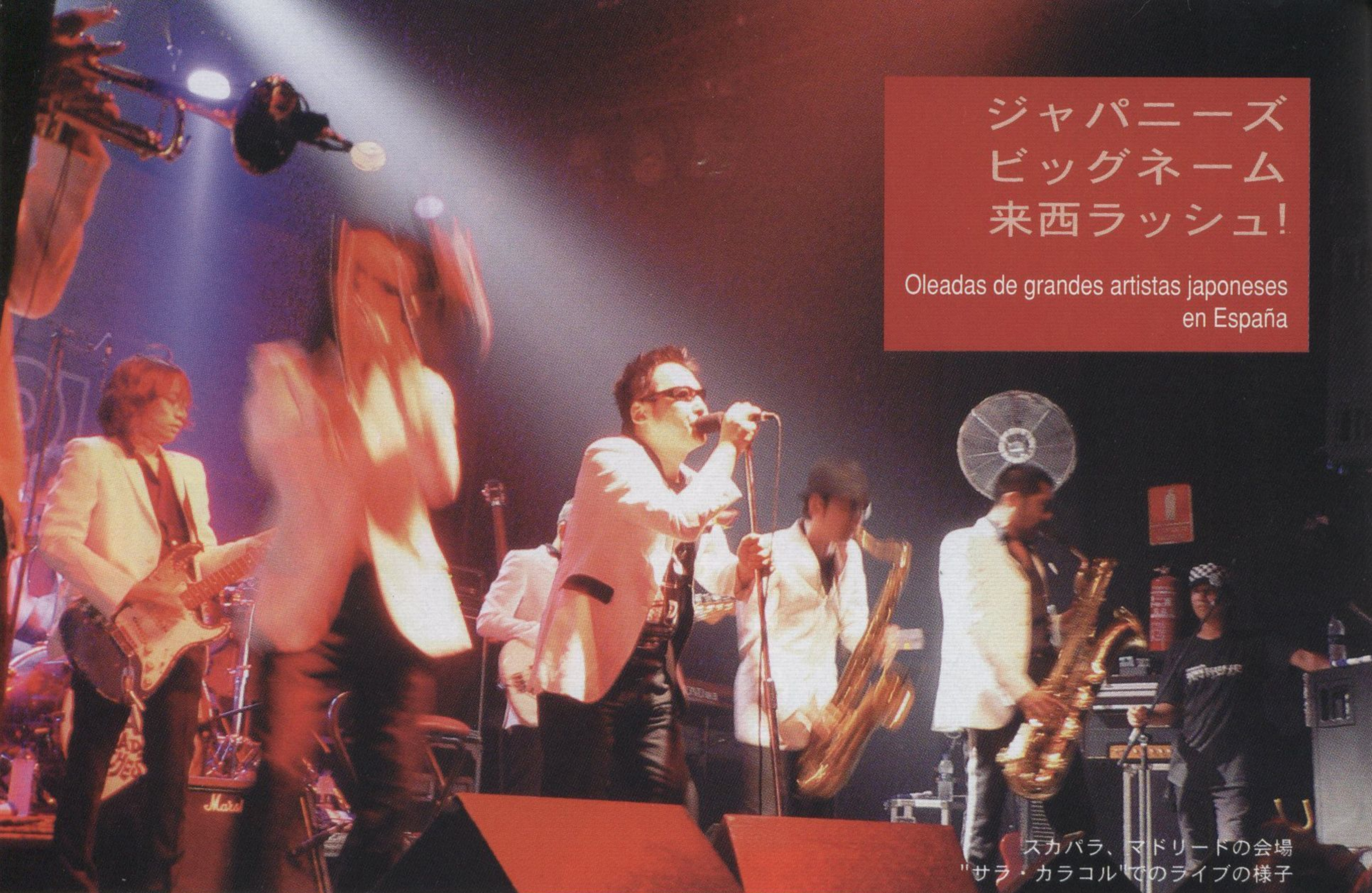


ジャパニーズ ビッグネーム 来西ラッシュ!

Oleadas de grandes artistas japoneses
en España



スカパラ、マドリードの会場
"サラ・カラコル"でのライブの様子

2006年晩夏、日本の大物アーティスト2組が立て続けにスペインを訪れた。それぞれジャンルは異なるものの、スペイン人の、また滞西日本人のハートをガッチリ捉える舞台を披露してくれた。

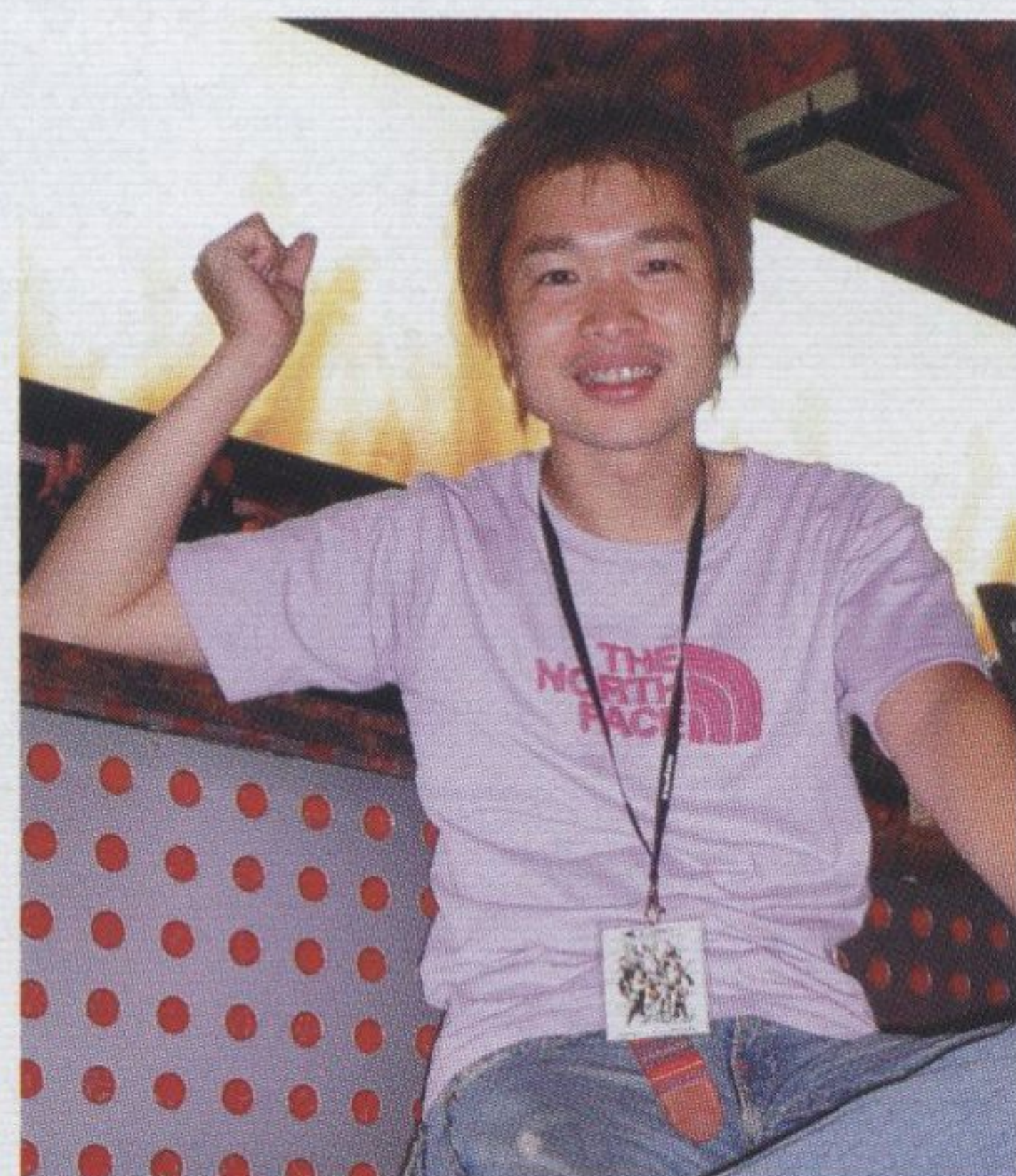
スカパラ ユーロ・ツアー2006

まずは、東京スカパラダイスオーケストラ（以下スカパラ）。2005年夏、この国に初上陸した彼らだが、今年にはニューアルバム『ワイルド・ピース』を引っさげての再来西となった。

8月25日～9月13日までの20日間で、6カ国16都市を回るという殺人的スケジュールで行われた『ユーロ・ツアー'06』の一環として、バルセロナ（8月30日）、マドリード（31日、9月1日）、ビルバオ（2日）で単独ライブを開催。計2,500人もの観衆を動員した。

各地ともどもチケットは早々と完売。1,200人収容可のバルセロナの会場前には、100人を越える人が当日券を目当てに長蛇の列を作り、またマドリードでは、ほんの10日前に決まった追加公演分も即ソールドアウトになるという人気ぶりだった。

マドリード公演開演前に、ドラムの茂木欣一さんにお話を伺うことができた。



スカパラのスポークスマン(?)
ドラムの茂木さん

「ステージの上からオーディエンスのムードを見ると、スカパラの楽曲、演奏、立ち居振る舞い、発言といったものがスペインの人たちと非常に共鳴しているような気がするんだよね。いやー、もの凄い手ごたえがあるんで、僕らもよっしゃーっ!!って（笑）奮い立ちます」とのことだったが、ライブの幕が開くやいなや、会場はモッシュ（ダンスの一種。ジャンプしたり他人を押ししたりすることで表現される）とダイブ（ステージ上から他のオーディエンスに五体を投置、ゆだねる動作）の嵐・嵐・嵐！そこにいる皆が、笑顔で暴れまくった2時間となった。

「新譜のタイトル『ワイルド・ピース』って、まさにスカパラ“そのもの”が巧く象徴された言葉だと思う。ステージングも演奏もワイルド、でもそこにあるのはピースフルな雰囲気。お客さんもニコニコしながら踊りまくっているというね」と、スピリッツ的にもピッタリ合致するスカパラとスペイン。いよいよ来年あたりには、この国でのディスクの公式リリースが実現するかもしれない。

通算12枚目になるニューアルバムについては「凄く明るいんだけど、太い。音も太ければ絆も太い。12枚出して今最も明るいアルバムが作れるというのは、メンバー同士がうまくいっている証拠じゃないかな」とコメントしてくれた。

吉田兄弟 初のスペイン・ツアー

もう1組は、伝統音楽『津軽三味線』を一気にメジャー・シーンに引き上げた若手奏者、吉田兄弟。欧州では初めてとなる単独ツアーを、ここスペインで開催した。9月19日にバルセロナの花市場劇場、21日にマドリードのシルクロ・デ・ベジャス・アルテス、23日にマドリード文化ホールという日程だった。

「実は、（国際交流イベントなどの）小さなライブという形ではスペインも含むヨーロッパの国々で演奏したことがあるんですが、単独のコンサートとしては初めて。以前来た

時にあまり自分たちを表現できなかった、という心残りがありまして、今回はリベンジと言いますか、オーディエンスの方々にどういう風に三味線を理解してもらおうか、ということをよく考えてステージを組みました」と、筆者担当のラジオ番組で意気込みを語ってくれた。



吉田兄弟、インタビューを行ったラジオ・シルクロにてのツーショット

「フラメンコも三味線もそれぞれ民謡。このセッションを通じて受ける

影響が、新しい作品につながれば」と言う彼ら、更なるひらめきが今後どのように楽曲に反映されるのか、今からとても楽しみだ。

文と写真: ラジオ・シルクロ『ソナ・ハボン』パーソナリティ

松嶋公美



マドリード文化ホールで
スタンディング・オーベーションを受ける二人